



女子高生の娘は、パパとエッチすること  
しか考えていない!!

序章 娘はパパに恋してる

一章 娘はパパを誘惑したい

Hシーン

序章 娘はパパに恋してる

砂埃が舞う幹線道路から伸びた小さな脇道に一つ折れ、そこから数十メートル先で信号機すらない寂れた十字路を更に右へと曲がる。途端、絶えず残響を轟かせていた車の騒音が、数千万の建造費が費やされた一戸建てという名の防音壁に遮られ、ぴたりと止んだ。

（我が家まであと少し、か）

ようやく帰路を実感し、入沢智鷹はまだ冬の面影を残した春の夜陰の中、ご当地スパーのロゴが入ったビニールをガサガサと揺らし「ふう」と息を零した。

電車で運ばれバスに揺られている時は、出勤中に生じる独特な緊張が身体を覆っている。停留所でバスを降り移動が徒歩に切り替わっても、この緊張に変わりはない。

しかし、社会の生み出す喧噪が途絶し、道行く人々に歩調を合わせる必要がなくなった途端、常に張り付いていた緊張がふわりと解れる。代わりに、あくせくと働いていた頃には気づかなかった一日分の疲労が、じわりと三十三才の身体を蝕む。

(今日は特に遅くなったからな)

サラリーマンの第二の肌と言いつても過言ではない、ビジネススーツ。毎日のように着続け、時には袖を通して感じる感覚すら希薄になるスーツだが、今は僅かな重みを肩に感じる。

手首に巻かれた時計を見やり、月光に照らされた文字盤に目を通す。いつもならこの辺りで午後六時を過ぎる程度だが、今日は午後八時を大きく過ぎていく。二時間近くも残業をしていけば、疲れが溜まるのも無理はない。

(まあ、この時期は仕方ないんだが)

道を洗う風に春の香りが紛れ込み、色の乏しい枝葉に鮮やかな新芽が目立つ季節ともなれば、社内にも新しい顔ぶれが交じる。智鷹の勤める部署にも大学を卒業したばかりの新人が入ってきたが、業務のイロハすら分からない新米がまともな仕事をできるはずもない。

毎年形を変え品を変え、新人というものはミスを犯す。当然のことながら、責任を

取るのは上の者の役目なわけだが、生憎と課の責任者は四月の頭に登山で両足を骨折し、現在も入院中だ。

そのため、今年三十三歳となった智鷹が課長代理を務めていた。代理とはいえ、下のミスは上が拭わなくてはならない。智鷹も昔は上司に迷惑をかけ、その都度滞った仕事を手伝って貰った経験があるだけに、現状に文句は言えない。

ただ、大切な娘と一緒に晩ご飯が食べられなかったことだけが残念であり、そこだけは不満を覚えずにはいらなかった。

(もっとも、一つだけ良いことがあったから、仏滅というわけじゃないが)

部下の尻拭いをし、娘と食卓を囲む機会も逸して散々な一日となったわけだが、悪いことばかりではない。帰り際に寄った有名な洋菓子店で、幸運なことに春季限定の莓タルトが二つ買ったのだ。

閉店時間より前に全商品が売り切れ、早々に店仕舞いするのもまれではない人気洋菓子店だけに、限定品が買ったのはある種の奇跡に等しい。帰路の最短コースから外れたところに店があるため、バスを一本逃してますます帰宅時間が延びてしまったが、これなら十分お釣りがくる。

(ダメ元で訪れてみたが大正解だった。これであの子ども喜んでくれるだろう)

当然のことながら、二つある苺タルトは智鷹がすべて食するわけではない。寧ろ、智鷹自身は別に食べなくてもいい。

肝心なのは、高校二年生となる娘の好物が苺であり、しかもこの洋菓子店のケーキに目がない点だ。

（好きなものを口にすれば、心も体もリラックスする……そうならば——）

ここ数ヶ月に渡って智鷹を悩ませている問題を、この苺タルトが解決に導いてくれるかもしれない——。

淡い期待を抱きつつ、智鷹はようやく辿り着いた自宅の門前にてタルトの収められた紙箱を握り直した。

築五年が経ち、風雨に打たれて微かな錆を浮かせた蝶番が不快を醸成させない程度の軋みをあげる。我が家の敷地へと身を滑らせ、半身を傾けて後ろ手に錠を下ろすと「ウォンツ！」と、低くも鋭い獣の咆哮が暗闇の奥から智鷹を捉えた。

「俺だよ。ただいま」

剣呑な誰何に一声返すと、それっきり警告は止んだ。代わりに暗がりには浮かんだ一對の瞳が瞬くと、次の瞬間、黒い塊が猛烈な勢いで駆け寄ってくる。

「おい待てっ！ 来るな！ ストップ、止まれっ！」

慌てて手を突き出した瞬間、掌からほんの数センチを残して、茶色の体毛に覆われた入沢家の番犬——チリユウが静止する。

「お前な、スーツ着ている時は飛びついて来るなって、いつも言ってるだろう」

仕事着が毛だらけになるという惨状を回避し、安堵の息を吐く智鷹とは対象的に、チリユウは微塵も言葉を理解していないらしい。こんな時間であるうと智鷹に遊んで貰えると思っているらしく、狐のように長い尻尾をブンブンと左右に振り、隙あらば前屈して飛びかかろうとしている。

三年前、子犬の頃に友人経由で智鷹に引き取られ、人間換算にすればとっくに大人になっているチリユウだが、やっていることは小さい頃とまったく変わらない。

「こっちはこの四年間で色々あったのに、いつもノーテンキなお前が羨ましいよ」

突き出していた掌をゆるめ、わしわしと頭を撫でてやる。入沢家に来たばかりの頃は両手にすっぽり収まる体躯だったのに、今では頭を包み込むのも難しい。

構って貰えるのがよほど嬉しいのか、チリユウはもっと撫でるとばかりに柔らかな耳を擦りつけてくる。

しかし、数秒もしないうちにびたりと身動きを止め、湿った鼻先をタルトの入った紙箱に向けて盛んにひくつかせ始めた。流石嗅覚が鋭敏な動物だけあって、もう土

産を見つけたらしい。

「ダメだ。これは俺とあの娘の分だ……というか、おまえ、酷い食あたりになっただけに懲りてないな」

フンフンと鼻息を撒き散らすチリユーを見下ろしつつ、智鷹は呆れ気味に溜息を吐く。まだチリユーが小さい頃、作りすぎたハンバーグを餌として与えたことがあった。腹を空かせていたチリユーはガツガツと凄まじい勢いでハンバーグを食ったもの、タマネギが混じっていたせいで数時間後には動物病院に行くはめになったのだ。

獣医から注意を受けた後は、どんなにチリユーがねだってきたても人用の食物は内容物を精査してからでないと食べさせない。

勿論、苺タルトは個数の観点からして絶対に妥協できなかった。

「もともと、お前も家族の一員だからな。仲間外れにするつもりはないぞ」

タルトの入った紙箱ではなく、別途手にしていたご当地スーパールのビニール袋をまさぐる。中から細長い加工品を取り出した瞬間、チリユーの目の色が露骨に変わり、左右に揺れていた尻尾が勢いを増す。

「ほら、お前の大好物だ。こっちの方がいいだろ？」

スーパ―なら何処にでもおいてある定番の魚肉ソーセージの封を破っていくと、待

ちきれなくなつたチリユーが盛んに鼻先を長い舌で舐め回す。

普通、犬といえば鶏やら豚やらの肉を好みそうなものだが、この元気の有り余つた愛犬は魚肉ソーセージが大の好物と来ている。きっちり晩飯にありついているはずなのだが、食欲旺盛な中型犬はだらだらと口元から涎を垂らしていた。

「よし、それじゃきちんとお手と伏せができたらこれをやろう。まずは——」

お手——と言いかけた矢先、音速もかくやという勢いでソーセージがもぎ取られる。智鷹が強奪に気付いた時には、既にチリユーはソーセージを啜えて遁走しており、素早く入沢家の別邸大小屋の裏へと隠れた。

数秒と経たずに犬小屋の裏から土が宙へと舞い上がり、チリユーがソーセージを隠すべく穴を掘り始めたことを知らしめた。

「……なんて即物的なヤツだ」

名前の元となつた土竜モヅラの如く、一心不乱に穴を掘り続けるチリユーは智鷹など一顧だにしない。

その清々しいほど欲望に忠実な姿に、智鷹はただ呆然としていた。

（俺は家長のはずなのに……）

食事や寝床も智鷹がいなくては成り立たないものなのだが、どうやらチリユーのヒ

エラルキーにおいて智鷹は丁稚以下の扱いとなつてゐるらしい。

(まあ、コイツには恩があるから文句は言えないが)

指に付着していたチリユールの毛を払い、智鷹は好き勝手に振る舞う愛犬を眺めて苦笑した。

\*\*\*

四年前、智鷹は最愛の妻――入沢恵美を事故で亡くした。

智鷹よりも年上であり、娘を持つ母親でありながらも、朗らかな笑顔で愛嬌を絶やさなかつた妻の横死は、入沢家から陽気を奪い去つた。

特に、まだ中学生で多感な時期にあつた娘は心の傷が癒えず、事故から一年経つても笑顔が戻らなかつた。

そんな陰鬱な状況を、入沢家に来たチリユールは一ヶ月とかからずに変えてしまった。智鷹が苦心を重ねても叶わなかつた娘の笑顔を、小さな子犬はあつという間に取り

戻し、家族に再び歓談を齎してくれたのだ。

それだけではない。娘は成績優秀だったものの、恵美の死によつて勉学も身につかなかつたり成績が著しく下がつていた。

このままでは志望校どころか滑り止めの併願校すら危ういと教師が警鐘を鳴らしていたものの、復活した娘は次の一年で一気に巻き返し、第一志望校であり地元で最も有名な私立校――慶徳女子高等学院に入学したのだ。

残された義父として入沢家を支えなくてはならなかつたとはいえ、義娘が一番苦しんだ時期に就社し、父として娘に寄り添えなかつたという、取り返しのつかない負目がある。

それだけに、自分の代わりに娘を癒やしてくれた愛犬には頭が上がりません。

(ただ、穴掘りだけはもうちょっと自重して欲しいんだが……)

庭のあちこちが掘り返され、月面のクレーターの如き様相を呈している状況を視認し、智鷹は悲嘆に暮れる。次の連休辺りには、どうやら無給の整地作業に汗水を垂らさなくてはならないらしい。

「ただいま」

若干の憂鬱を滲ませつつ玄関の扉を開く。靴を脱ぎ、上がり框に足をかけると、智

鷹はキッチンへと直行した。

早くスーツを脱いで部屋着に着替えたかったが、魚肉ソーセージと一緒に牛乳やチーズといったナマモノも購入していたので、早めに冷蔵庫へ入れなくてはならない。キッチンに繋がるダイニングルームの扉を開けた途端、テーブルに並んだ皿の数々が智鷹の視界に飛び込んでくる。

大根と一緒にじっくりと煮込まれた厚切りの豚バラ。薄切りのインゲンと人参が添えられた、彩り豊かな切り干し大根の煮物。大ぶりのなめこが浮かぶ味噌汁――。

皿、小鉢、椀からはもうもうと湯気が沸き立ち、熱い靄に混じって漂う馥郁たる香りが、昼食以来何も口にしていない口腔にじわりと涎を染み出させた。

「おお……」

胃袋から急速に迫り上がってくる空腹感が、無意識の感嘆を引き出した。眼前に用意されていた見事な夕餉に見とれていると、かたんと戸棚の閉まる音が隣のキッチンから響く。

音に釣られて首を回すと、掌に茶碗を抱えた少女と目が合った。

(アリス――)

最も大切な家族にして亡き妻が遺した義娘の名を、智鷹は胸中で紡いだ。

切れ長の瞳にたなびく長い睫に、美しく揃えられた眉。若々しい健康美を宿した朱い唇に、柔らかなラインを描いた頰。

薄手のパーカーからは緩やかな起伏を描いた鎖骨が露出しており、斑の無い雪肌がほっそりとした首筋を際立たせる。

春の夜陰はまだ肌寒さを残しているが、ショートパンツから大胆に伸びるスラリとした美脚は、今年十七歳となった少女の瑞々しい素肌を堂々と晒していた。

「おかえり」

「あ、ああ。ただいま」

義娘から真っ直ぐに見つめられ、ほんの微かに智鷹はたじろぐ。

(綺麗な瞳だ)

アリスは誰も異論を挟む余地の無い美少女だが、中でも最も目立つのは透き通る双眸だ。清流で磨かれたラピスラズリを彷彿とさせる蒼い瞳は、毎日見ているはずなのにエキゾチックな驚きを不意に脳裏へとよぎらせる。

麗句としての表現ではなく、実際に深雪と並べても差異の無い肌理は、赤い血が通っているとは思えないほどに純白だ。

(極めつけに、この髪だ)

更に娘の美貌を際立たせるのが、輝くばかりの髪色だ。ゴールデンブロードのストレートヘアは屋内の照明を受けて煌びやかに流れ、アリス自身の優れた容姿も相まってこの世ならざる幽玄な美しさを醸し出している。

妖精なるものが存在するとしたら、それはアリスと瓜二つの姿をしているだろうと智鷹は思う。

(チェリーの吠え方で、俺が帰ってきたとわかったのか)

前世はモグラかと言いたくなるほど穴掘り好きのチリユードだが、最低限番犬の役割は果たしている。知らない人間が来れば延々と吠えて威嚇するが、身内なら反射的に吠えても以後は黙するので、智鷹の帰宅を察して自室から出てきたのだろう。

「お肉と切り干し大根、足りなかったらまだ冷蔵庫に余りがあるから」

「あ、ああ。わかった」

見た目だけなら誰がどう見ても外国生まれなのに、いささかの不和もない完璧な日本語を話すので、アリスを知らない者はその流暢すぎる発音に誰もが一度面食らう。

アリスの義父となつてかれこれ八年近く経つが、先入観とは厄介なもので義娘がネイティブに日本語を話し、純和風の料理を作ってくれる現実に、未だに違和感を覚える時がある。

「冷めないうちに食べてね」

智鷹が庭先でチリユードとじゃれついている間に、手際よく冷めた食事を温め直してくれたらしい。アリスは最後に白飯の盛られた茶碗をテーブルに置くと、もう用は済んだとばかりに淡々とダイニングルームを後にした。

「ち、ちよつと待ってくれ」

二階の自室に向かうべく踵を返したアリスが、廊下に出る直前で音も無く振り返る。ゴールデンブロードの髪が少女の背を洗い、煌びやかな艶が眩しく跳ねた。

「何？」

喜怒哀楽のいずれも含まない、ニュートラルな応答。

極親しい者なら、その澄んだ声に微かなこわばりが感じ取れただろう。その数少ない者に該当する智鷹は、何も気づかない体を装つてにっこりと笑顔を作った。

「ほら、開洋堂の苺タルトを買ってきたんだ。一緒に食べないか」

これ見よがしに紙箱を掲げ、子猫に鈴の音を聞かせるように小さく揺らす。

「……いいい」

「開洋堂」と、洋菓子店らしからぬ古風な字体が印刷された紙箱をちらりと眺めるも、アリスは興味なさげにぼつりと呟いた。



「えっと……莓タルト、嫌いだったか？」

あまりに素っ気ない態度に、智鷹は動揺を隠しきれない。まさか娘の好物を間違えたのだろうか、過去の記憶を幾つも引き出し、見直していると「そうじゃないけど」と、アリスが続けた。

「これから復習しなくちゃいけないし、もう夜も遅いからそんな甘い物食べたら太っちゃう」

「そ、そうか……そう、だよな」

うっかり「別に太っていい」と、喉元まで言葉が出かけたが、こんな台詞は何の慰めにならないどころか、当の女子には禁句でしかない。

優れた顔立ちもさることながら、明日からでもモデルになれるスタイルの持ち主だと智鷹は思っているのだが、そこは娘にしかわからない悩みがあるのだろう。

ダイエットのやり過ぎて健康が害されているという状況ならばとにかく、娘の個人的な事情には父といえど容易に踏み込んでいいものではない。

「明日食べるから」と言い残し、アリスはするりと廊下へと消えた。

しばらくは階段を上る微かな足音が聞こえていたが、やがてそれも完全に消え、静寂だけがダイニングルームに満たされた。

（良い方法……だと思ったんだけどな）

紙箱を掲げていた腕をだらりと下げ、智鷹は肩を落として意気消沈する。

よくよく考えれば、服やアクセサリにお金をかけるだけではなく、いつの間にかメイクをし始めていたお年頃なのだ。好物を持つてくれば歓心を買える等という幼稚な餌付け染みやり方は、十七歳の女子高生にはもう通用しないらしい。

（どうやったら、前みたいなのアリスに戻ってくれるんだろうな……）

莓タルトを紙箱ごと冷蔵庫に入れ、智鷹は憂鬱な溜息を吐いた。

同じ屋根の下で暮らす家族でありながら愛想も小想も感じられないアリスだが、これは何も昔から続いていたわけではない。元より物静かで、用がなくとも頻繁に話しかけてくるタイプではなかったが、智鷹が話しかけるときちんと応じてくれたものだ。一言目でコミュニケーションが打ち切られることはなく、千変万化とはほど遠いがしばし柔らかな笑顔を見せていた。

ところが、ここ数ヶ月前からどうにもアリスの様子がおかしい。

（なんだか、俺と顔を合わせるのを拒んでいる気がする）

以前はリビングで寛いでいたらアリスも構わず近くのソファに座ってきたものだが、今ではリビングそのものに寄りつこうとしない。

話しかけても二言三言で会話を打ち切ろうとするし、まともに目を見ようとしなない。  
(悩みを抱えていたとしても、アリスらしくない)

智鷹が年長者としての知見を備えていると理解しているためか、アリスは悩み事があるとすぐに相談してくれていた。もちろん、今回の件についても智鷹が「何か悩みがあるのか？」と訪ねたものの、アリスからの回答は「何も無い」というものだった。それ自身が嘘の可能性は高いのだが、だからといって「嘘を吐くな」と自白を促すのはいくら何でも過干渉を通り越して横暴でしかない。

(となると、遅れてやってきた反抗期か)

もし、悩み自体はあるのだが言葉にできない漠然としたものなら、思春期特有の行動として一応の説明はつく。智鷹にしても、中学生の頃は訳もわからず親に反抗していたものだし、話しかけられてもおざなりな返答しかできなかったものだ。

アリスの場合、中学生の頃は母親が急逝した事もあり、暢気に思春期に浸る余裕すらなかった。高校二年生になって、突然自我同一性の揺らぎを自覚したとしても不思議ではない。

智鷹の思春期とは随分と様相が違うが、男女の性差もあるし社会的・文化的背景も異なるのだ。親への反抗方法が異なってもおかしくはない。

(しかしなあ……アリスのアレは、何か違う気がするんだよな)

冷めないうちにと言われたので、着替えを後回しにしてアリスの用意してくれた晩飯にありつく。

「……美味しい」

茶碗片手に温められた豚バラを口に入れると、甘辛さと脂の旨味がじわりと舌に広がる。随分と長時間かけて煮込んだのだろう。豚バラはかなりの厚切りだったが、殆ど抵抗なく口内でほぐれ、肉の中に閉じ込められていた滋味が舌に染みこむ。微かに香る生姜の風味が脂のくどさを和らげ、更なる食欲を喚起させた。

切り干し大根の甘みを活かした煮物は脂だらけの味蓄を中和し、そこになめこ入りの味噌汁が加えられることで味覚がリセットされる。

主食から汁物まで満遍なく口に運ばせる、見事な献立だった。

(もし反抗期だったら、こんな丁寧な料理を作らないよな……普通)

娘の手料理は、どれも手が込んでとても美味しい。だからこそ、どうしてもアリスが反抗期にあるようには思えなかった。

普通、反抗期なら父親へ食べさせる料理なんて手を抜いてもおかしくない。いや、それどころか作ることを拒否しても不思議ではない。

それなのに、アリスは毎食毎食、丁寧に料理を作る。即席麺やレトルト食品が食卓に置かれていた事など、一度だつてない。

(他の家事だつて、まったく手を抜かないし)

年頃の娘なら父親の服など触れるのすら嫌がりそうなものだが、アリスはまったく気にする素振りすらない。一度、「洗濯物を分けなくていいのか？」と、恐る恐る尋ねてみたことがあったが、帰ってきたのは「そんなの時間が増えるだけ」と、実に淡泊かつ合理的な答えだった。

最初はぎこちなかったアイロンがけも動画サイトなどで技術向上に励んだらしく、いつの間に智鷹より上手にスーツのアイロンがけができるようになっていた。

(良い子——なんだよな。誰がどう見ても)

入沢家の家事全般は今やアリスが取り仕切っているのだが、これは智鷹が望んだわけではない。むしろ、恵美が亡くなった後は智鷹が家事の大半を担っていた。それがいつの間にかアリスの担当する役割が増えていき、気づいた時には家事はアリスが統括するようになっていた。

もともと智鷹とて、高校生のアリスを家事に縛り付けるつもりはない。家事は見た目以上に体力を要求されるし、時間も取られると経験から把握している。

十代でいられる時間は、とても短い。それだけに、家事はほどほどにして高校生活を楽しんで貰いたかったのだが、アリスは「料理とか掃除とか、好きだから」と、否定しがたい理由で棄却してくる。

家事に注力して学業が疎かになっていたらマズいとも苦慮したが、たった一年で滑り止めから本命校に受かった地頭の良さは伊達では無く、成績は常に学年トップクラスを堅持していた。

こうなると、もう家事を止めさせる理由はない。

(優等生を地で行くような子なのに、お小遣をねだつてくるわけじゃないし)

アリスの在籍する学校は有名な私立校だけあって裕福な家庭の子女も数多い。一方で、智鷹自身は一般的な会社員であり、当然アリスへの小遣いはさほど多いわけでもない。

もつとも、月々の生活費もアリスが管理しており、入沢家の経済状況をある程度把握していることもあってか、小遣いの件で不満が出たことは一度も無い。

それどころか、服代や交友費を節約して最新の食器洗い機やロボット掃除機を購入しようとしていたので、慌てて智鷹が調達してきたこともある。

「恵美……年頃の女の子は難しいよ」

熱々の白飯を頬張りながら、彼岸にいる妻に向けて智鷹は誰にも語れない悩みをぼそりと漏らした。

\*\*\*

後ろ手にドアを軽く押す。微かな間を置いてガチャリと音を立ててラッチボルトが固定された。義父の食事の支度を終え自室に戻ったアリスは、蒼い双眸を微かに細めると「ふう」と、物憂げな溜息を零す。

机の上で開きっぱなしだったノートと参考書を見ることも無く、ラップトップで一時的停止をかけていた音楽を再生させることもなく、部屋の奥に置かれたベッドに向かう。

そのままストンと腰を下ろしたアリスは、一切表情を変えることなくゆっくりと身体を真横に倒した。女子高生の上半身を受け止め、ばふりと羽毛布団の端が膨張する。

「うゝッ！」

座骨から捻れたままだった両脚をマットレスに引き上げた刹那、長く伸びた両脚がバタバタと宙を蹴った。両腕で抱え込んだ枕に顔面を押しつけ、唸り声とも悲鳴とも区別の付かない曇った絶叫を放出しながら、アリスはゴロゴロとベッドで横転を繰り返す。先ほどまでクールに父親と接していた美少女からは想像も付かない変貌ぶりだった。

数十秒後、速筋に蓄えられていたエネルギーをすべて使い果たしたアリスは、小さく息を乱しながらごろりと仰向けになる。

「はあ……何やつてるの……私……」

枕をベッドの隅に置き、頬に張り付いたゴールドデンプロンドの束を払い、直視するには眩しすぎる照明に腕を翳す。

父に無関心な素振りを見せていたアリスだが、何も好きであんな冷たい態度を取っていたわけではない。

本当は、父と話をしたい。大好物の苺タルトを食べながら、今日起きた出来事をいっぱい話したかった。仕事で疲れた心身を、ゆっくりと労ってあげたかった。

「パパ……」

ベッドボードに置かれていたスマートフォンに手を伸ばし、誰にも見せられないフ

オルダを開く。指先をタップし、愛する義父の姿が画面いっぱいになると、白磁の如き頬を薄い紅色に染めたアリスは悩ましい吐息を零した。

\*\*\*

義父である智鷹を家族としてではなく一人の男として愛している——その驚愕すべき事実のアリスが気づいたのは、数ヶ月前の話だ。

契機となったのは、映画館での思いも寄らぬ一幕だった。

「アリス。一緒に映画を見に行かないか？」

まだアリスが父と正常かつ健全な距離感を保っていた、ある日の休日。テレビを付ければニュースか動物系のドキュメンタリーばかり見ている義父が、珍しく映画を見に行くと言い出した。

なんでも、義父が若い頃に上映していた映画の続編が公開されるらしく、ファンだった俳優やら女優やらが助演として登場するらしい。

アリス自身も映画好きで興味を持っていた作品だっただけに、二つ返事で了承した。「席が全部売り切れ？」

アリスの住む齋美市で最も大きな映画館に訪れたものの、思わぬ展開に出鼻を挫かれることになる。

日をずらすか時間をずらすか、どうしたものかとアリスと智鷹が相談していたところ「それでしたら」と、券売機の側で控えていた映画館のスタッフが入った。

「カップルシートは如何でしょうか？ こちらなら席に余裕があります」

スタッフとしては、極当然の対応だったのだろう。義父はまだ三十三歳だが年より若く見られる傾向があり、反対にまだ十七歳でありながらアリスは大人びた雰囲気から女子大生に間違われる。

事前情報が何もない状態で智鷹とアリスの間柄が親子だと見抜くのは相当に難しい。

「いえ——」

結構です——と、アリスは断るつもりだった。スタッフとしては、ただ男女のペアに相応しい席を紹介したつもりなのだろう。

しかし、アリスにとってカップルシートは恋仲の男女に限定して座るべきだという、一種の先入観があった。

そうなれば、件のシートで義父の隣に座る資格があるのは亡き母において他にない。娘であるアリスが代わりになるなど、烏滸おこがましいとすら考えていた。

「それじゃ、ペアシートを一枚」

ところがアリスの拒否を上書きする形で、義父はあっさりとペアシートを購入してしまう。義父の決断にまるで躊躇ちゅうちゆが無かったため、アリスの反応が一瞬遅れた。

「えっ——でも……」

その席はアリスなどが座って良いものではない——。

父に相応しいのは娘ではなく母のはずだった。

「大丈夫だ。娘にチケット代を捻出させるわけないだろう」

家計を預かり儉約を心がけているアリスが、ペアシートの価格を気にしていると思っただろう。見当違いな杞憂きゆうを笑い飛ばした義父は、当惑するアリスをよそにスタッフに礼を述べ、手早く支払いを終える。

「さあ、行こう。上映まであまり時間が無い」

先導する義父がアリスの手を握る。智鷹は親としてごく当たり前の行動をしたつもりだったのだろう。小さい頃から、アリスと歩調を合わせ人混みの中を歩く際、義父はアリスの手を握った。

アリス自身が成長したこともあり、昨今では滅多に行わなくなっていたが、映画館に来てから密かに興奮していたのだろう。義父はアリスの手を握ったまま意気揚々と歩を進める。

(パパが手を……)

義父の少し固い掌に、女子高生の柔らかな指が包み込まれる。今まで何度も経験していたはずの行為なのに、胸の鼓動が早鐘を打つ。

幸い、カップルシートに到着した頃には照明が落ちかけており、朱色に染まったアリスの頬は義父に覺おぼられなかった。

(ここにいる人たち、みんな恋人同士だ)

二人どころか三人座ってもまだ余裕がありそうな豪華な長椅子に腰掛けつつ、アリスはちらりと周囲を見渡す。

カップルシートというだけあって、座っている者たちは誰もが若い男女であり、互いの距離感と薄闇の中でもわかる諸処の仕草から、恋人同士なのが容易に見て取れた。そんな中、父と娘の間柄である男と女が紛れ込んでしまった。

(うん……他の人たちから見れば、私とパパだって——)

カップルシートに滑り込みで入ってきた男女が、恋人同士として見られないはずが

ない。

(私とパパが恋人……)

トクン——と、一際大きな鼓動が、アリスの肢体を微動させる。

その瞬間、自分が抱いていた智鷹への想いは父としての敬愛ではなく、一人の男としての恋慕だと気づいた。

\*\*\*

(思い返せば、前兆みたいなものは感じていた)

スマホを一旦胸に置き、アリスは思い出に火照っていた身体から、「ふう」と熱い吐息を零す。

アリスは、そもそも男性全般に強い忌避感を抱いていた。金髪碧眼という、ただでさえ目立つ要素もさることながら、優れた容姿を持つアリスは、とにかく人目を引く。同性からは羨望の眼差しと愛玩される程度だからまだ良いが、男性からはここに性

的な欲望が確実に絡んでくる。それらは視線は当然として、声、仕草に着実に反映されているため、そのすべてがアリスにとって不快だった。

一方、義父はと言えば、そもそも最初に出会った時からして、当時は未亡人であった母が存在していた。もちろん、義父からの好意は感じられたが、それらは愛する女の娘という、いわば好意のフィルターがかけられていた。

性欲はもちろん、女としての好意が一切含まれない純然たる好意だったからこそ、アリスもまた義父に心を開いていった。

(パパがいなければ、今の私はなかった)

一時は男に対する嫌悪が酷かったが、そうしたアリスの根深いストレスを察知した義父は母と相談してメンタルクリニックに通わせ、負担を緩和させてくれた。

更に義父は、万が一の事態に備えて知り合いが経営する警備会社に連絡し、アリスに特別な護身術を学ばせてくれた。

その甲斐あって、いざとなったら自分で危機を振り払えるという自信がついたことで、中学へ進学する頃にはアリスの男性忌避は殆ど無くなっていた。

こうしたアリス個人をこの上なく尊重した真摯な教育方針は、義父への絶対的な信頼を結実させていく。

アリスにとって、義父こそが最高にして理想の男性像だった。

(最初は、とても混乱した)

血は繋がっていないとはいえ、智鷹はアリスの親だ。

義父に恋愛感情を抱くのはおかしいのではないか？

義父への恋慕は亡き母への背信ではないのか？

一時は散々に懊悩したもののだが、日々膨れ上がっていく乙女恋心には敵わない。直接は血の繋がりが無いこともあり、アリスは義父への想いを肯定した。

(でも、本当の問題はここから先だった)

アリスは男から向けられる欲望に極めて敏感だ。相手がどれだけアリスに対して邪念を抱いているか、すぐにわかる。

その優れた直感には、皮肉なことに非情な現実をアリスに突きつける。

(パパってば、私を全然女として見てくれない)

それ自体は、昔からわかりきっていたことではある。

義父がアリスを少女として見ることも無く、純然たる家族として見てくれたからこそ、全幅の信頼を寄せられた。これまではその応じ方で何も問題なかったわけだが、これが義父を男として見始めると大問題となる。

何故なら、アリスは義父に恋心を抱いているというのに、義父と来たらまったくアリスを女として見ていないのだ。

(自分勝手なのはわかってる……わかってるけど……)

少し前まで父の澄んだ愛を賞賛していたというのに、自分の立場が変わった瞬間に情欲を抱いてくれないと嘆くなど、掌返しも甚だしい。

我ながらあまりにも無茶苦茶な翻意だと思う。

(けど、あんなに頑張ったのに興味抱いてくれないなんてショックだよ)

アリスとて自分の変心ぶりに何の反省もないわけではない。義父に女としてアピールするため、ちよつと髪型を変えたり、メイクを大人っぽくしてみたり、小遣いを切り崩してお洒落な服を着て、それとなく好意を匂わせた。

しかし、それらはすべて盛大な空振りに終わる。かつて、アリスの男性への強い忌避を見抜いただけあって、義父はアリスの変化にすぐ気づく。

だが、贈られる言葉は実に平易なものでしかない。「よく似合ってるよ」や「可愛いわ」といった褒め言葉は別段珍しくもなく、子供の善行を褒めるような杓子定規な賞賛でしかなかった。

(やっぱり……パパ好みの女じゃないからかな)



スマートフォンに指を滑らせ、フォトアルバムから亡き母が映し出されたスナップショットを見つめる。

アリスは自他共に認める美少女だ。同性の友達からは容姿を褒められるし、誠に遺憾ながら男の目を引くことから、自画自賛ながら優れた顔立ちをしていると思う。では、アリスの生みの親である恵美はどうかと言えば、これがびっくりするほど似ていない。あまりにも個々のパーツに親子としての共通項が見られないので、友達に母の写真を見せると大概の場合は困惑される。

母である恵美は、美人系であるアリスと異なりとても可愛らしい。犬種に例えると、アリスがジャーマン・シェパードやコリーだとしたら、母はマルチーズやポメラニアンといった風情だ。

実際、その手の小型犬を彷彿とさせるほど、母はとても明るく愛嬌のある女性だった。昔、ふとした興味から義父は母の何処が好きかと問うたら「笑顔」と、即答されたことを覚えている。

それでは父親——アリスが幼い頃に病死した実の父に似たのかと言われれば、これも違う。イングランド人の実父は栗色の髪に緑色の瞳をしており、顔面のパーツにおいても類似点は皆無だ。

(隔世遺伝の見本だよ。私って)

ならば一体誰に似ているかと言えば、父方の祖母である。しかもただ似ているだけではなく、同一人物といっても差し支えないレベルで似ている。

荒いカラー写真に映し出された祖母の若かりし頃の姿は、メイクとヘアスタイルを現代風に変えればアリスと見分けが付かないほどだ。

(別に、お祖母ちゃんが悪いわけじゃないし、感謝もしてるけど)

祖母は元・舞台女優だっただけあってか、年老いてなお美しさを失わない。そんな優れた容姿を遺伝させてくれたのだから、感謝しなくてはバチが当たるというものだ。一方で、どれだけ優れた容姿であろうと、意中の相手の琴線に触れなければ宝の持ち腐れでしかない。

(パパがあんまりにも無反応だから、そのうち怖くなってきた)

これまでアリスは自分の好意を義父にわかって貰いたかったが、ある時ふと気付いてしまった。

女としての興味を露ほども抱いてくれない義父が、アリスの恋心を知ったらどうなるか——。

(普通に考えたら、絶対に嫌われる)

これまで娘としか思っていなかった少女から、いきなり男として興味を持たれるのだ。この異様さは立場を入れ替えて想像すれば、如何に自分のやっていることが危険かわかる。

それこそ、これまで娘として注いできた愛情が、一瞬にして嫌悪に変わっても不思議ではない。

(それがこじれて、あんな露骨にパパを避けるようになって……)

義父への想いは、依然として変わらない。それどころか日に日に強くなっていくだけに、この片思いを義父に悟られるわけにはいかない。もし、悟られたら、義父からこれまで注がれてきた純粋な愛情そのものを失いかねない。

煩悶の末、ここ数ヶ月アリスは義父とまともに相対せず、自分の気持ちを悟られまいと避けるようになっていた。

(パパに私の気持ちを知られて、その上で嫌われたりしたら……)

そんなことになるものなら、家族関係は破綻する。自宅が針のむしろになるのはまだマシで、血縁がないのだからあつという間に崩壊する可能性すらある。

(こんなバカげたこと、いつまでもやっていられない)

アリスのやっていることは、自暴自棄的なワガママに過ぎない。そのワガママで義

父を不如意に冷遇し、家庭の不和を醸成させているのだから、言い訳のしようがない愚行である。

(何とかしなくちゃいけないのはわかってる……けど……)

状況を打開する方法は、あるにはある。一番手っ取り早くかつ確実なのは、アリスが義父への想いを諦めることだ。

これによって父への不当な八つ当たりは停止し、家族関係は平穏を取り戻す。

(それはイヤ。絶対的にイヤ!)

そんな簡単に諦められるなら苦勞はしない。母という伴侶がいた相手に恋患いをした時点で激しく思い悩み、それでもなお好きという気持ちが抑えきれなかったのだ。

数字を入れ替えるだけで結果が異なる算術とは異なり、乙女の恋慕はそう簡単に書き換えられない。

(パパに私以外の女ができるなんて……無理。絶対耐えられない!)

義父に恋をして自覚したのだが、アリスは相当に嫉妬深い。母は例外として、義父の隣に妙齢の女が座るなど、考えただけで澀んだ感情がせり上がってくる。

以前のアリスなら、仮に義父に新しい恋人ができようものなら、めそめそと泣いて悲恋に暮れていただろう。

しかし、護身術を通じて心身を鍛え、己を超克していく経験を経た所為もあってか、涙に臉を腫らして終わるなど真つ平だった。

(パパはモテやすいから、なおさら油断できない)

俳優顔負けで黄色い声が浴びせられる甘い顔立ちの男でこそないが、人柄が良く女の機微にも目が届くので年齢など関係なく好意を寄せられやすい。

アリスという巨大な瘤がくっついている内は何もないかも知れないが、独り立ちしたら言い寄られる可能性は激増する。なまじ血の繋がりが無く、義父の再婚を止める権利も皆無なため、そうなれば手出しができない。

(となると……結局のところは——)

義父に恋心を受け入れてもらい、娘としてではなく女として愛して貰うしか道はない。問題は、このやり方が絶対に失敗できないことだ。万が一にでも失敗しようものなら、単なる失恋だけではなく、最悪家族関係が崩壊する。

そうした破滅的な危惧がつきまとうのであれば、玉砕覚悟で告白するなど到底出来る話ではない。

(ダメ……自分一人だと、もう限界……)

考えても考えても、活路に至る道筋が見えない。思考がぐるぐると脳裏を巡回する

だけで、現状を一変させるアイデアが浮かんでこない。

なんとか学業と家事を両立させているが、この精神状態ではどちらかに支障を来しかねなかった。優等生の看板が外れるにしても、家事が疎かになるにしても、義父からの評価失墜に繋がる事態だけは絶対に避けなくてはならない。

(私一人でダメなら、誰かに相談したいけれど……)

こんな悩みを打ち明けられる人物は、必然的に限られる。アリスと親密な関係にあり、年齢も近く、知見が広く、大人の彼氏がいてアドバイスを説得力がある——。

そんな都合のいい条件に当てはまる人間など——。

(——いた)

びったりの条件に当てはまる人物が、幸運にもアリスの通う学校にいる。アリスは小一時間迷った末に、スマホのアドレスから該当する人物を開き、通話アイコンを押した。

一章 娘はパパを誘惑したい

正午を回り三時を過ぎれば飲食店の席は空席だらけだが、スイーツカフェの場合はその限りではない。特に、若く瑞々しい少女達が通う高等学校の帰り道に店を構えていれば、その日一番のかき入れ時となる。

空から青みが消え、西に傾いた日差しが柔らかな茜色に変わろうとする店内は、席の大半が女生徒で埋まっている。

そんな店の隅にあるボックス席に、アリスは一人で座っていた。

他の客——というより、女生徒達が友人らと談笑に花を咲かせている中、アリスは黙々と本日出された宿題を解く。今日はいつもあり自由に使える時間が少ないので、僅かな余暇でも有効に利用しなくてはならない。

何故ならば——。

「こんにちは」

物理の例題を読み解こうとした矢先、テーブルに広げたノートに薄い影が落ちた。

「あ——」

その影の落とし主を見上げた瞬間、アリスはペンを置いて席を立つ。

「生徒会長。わざわざお時間を割いていただき、ありがとうございます」

アリスが深々と一礼すると、生徒会長と呼ばれた少女がばちばちと双眸を瞬かせた。

「もう学院の外だから、生徒会長なんて付けなくてもいいですよ」

「それに」と、少女が続ける。

「先輩が困っているのに、先輩として見過ごせるわけじゃないじゃないですか」

そう言うと、アリスより背丈の低い女生徒——友人にして先輩である慶徳女子高等学院の生徒会長——天海沙羅<sup>サハラ</sup>が、ニコリと微笑んだ。

\*\*\*

アリスとサラの出会い、かれこれ一年生の頃まで遡る。当時、母が亡くなってしばらくの間は、悲嘆に暮れるアリスを慮ってすべての家事は義父が行っていた。

愛犬のチリユーが来てくれたことでアリスは徐々に日常生活を取り戻していったが、母が抜けた穴はやはり大きかった。

慶徳女子高等学院——通称「慶女」に進学する頃、義父に代わって家事の大半を肩代わりできるようになったが、決して余裕があるわけではない。学業を疎かにせず家事にも手を抜かないためにも、部活動には参加しないつもりだった。

「生徒会に入りませんか？ 入るともれなく内申書がプラスになりますよ」

各部活が新入生獲得にあたって華やかな勧誘に色めき立っていた春の校内で、恐ろしく即物的な餌をぶら下げて人員募集をかけていたのが生徒会であり、当時の副会長であるサラであった。

そのまま横を通り過ぎるつもりだったアリスだが、内申点が良くなるという情報に思わず足を止める。大学に進学する際、これは大いにプラスだ。しかし、家事をしつかり行い義父をきちんと労りたいと考えているだけに、生徒の自治組織という、如何にも面倒な雑事に加わる気にはなれない。

一呼吸する間に脳裏で検討と選択を終えたアリスが去ろうとするも、ギョツとブレザーの袖が背後から握られた。

「もし入ってくれるなら一年の中間と期末テストの範囲、こっそり教えてあげちゃいます」

驚いたアリスが振り返ると、ブレザーの袖から手を離れたサラが唇に人差し指を当て、ちよつとお茶目にウインクした。

\*\*\*

(サラ先輩と知り合ってから、もう一年……か)

やや強引ながらも生徒会に引き込まれたアリスだが、居心地自体は決して悪くはなかった。年間行事のスケジューリングやイベントプログラム立案といった主な仕事は、基本的に上級生が行い一年はその補佐に回る。一部音楽系を含む体育会系の部活と異なり朝練もないので、時間の圧迫もない。

生徒会のメンバーも和気藹々としているので対人ストレスも無く、中でもアリスが特に仲良くなったのが現生徒会長であり当時生徒副会長だったサラである。

一つ年上のこの上級生はアリスと家庭環境が似ており、しかも互いにハーフということもあって、すぐに親近感を覚えた。また、奇遇なことに互いに家事の大半を担っていることもあって、話題に事欠かなく、プライベートで連絡を取り合うようになるまで時間はかからなかった。

サラとの付き合い合いそのものはまだ短い、今では慶女で誰よりも仲が良い。

(いつ見ても、サラ先輩は可愛い……)

オーダーした春季限定丸ごとイチゴパフェを幸せそうに頬張るサラを眺め、アリスはつくづく思う。一つ年上であり、慶女の三年生であるはずのサラだが、その見た目はおよそ女子高生のものではない。小さな背丈と童顔のため、その容姿は最大限に譲歩して女子中学生がせいぜいであり、見る人が見れば小学生とすら見間違える。

慶女の制服を着ているからこそ女子高生扱いされるが、私服だったら子供料金で電車に乗ったところで誰も咎めないだろう。

(でも、中身は生徒総代に相応しいポテンシャルを持っているから、誰も会長職に異を唱えない)

並んで座ればアリスの方が上級生と勘違いされそうなサラだが、成績はトップクラスを維持している。おまけに、背丈こそ小さいものの面倒見が良く、愛嬌があつて年齢を問わず気さくに話しかけてくれるので、同級生にも下級生にも人気がある。

(それでいて彼氏がいるんだから……ある意味完璧だよね)

極親しい人物にしかその存在を知らされていないが、サラには年上の恋人がいる。女子校という環境もあってか、彼氏がいる生徒はなかなか少ない中、優等生でありながらきつちりと青春を謳歌しているのだから、人は見かけによらない。

もつとも、その年上の彼氏とやらはロリコンではないのか——と、いう懸念がアリスはどうしても拭えなかったが——。

「それで、相談って一体何なんですか？」

ストロベリーソースがかけられた生クリームを崩し、十分な糖分を補充したサラが、指に挟んだロングスプーンをグラスの縁に載せた。

「ええと……」

先ほどまでは生徒会長であるサラの存在が気になってか、ちらほらとこちらのボックス席を見ている生徒がいたが、ある程度時間が経過していたからだろう。今はもうそれぞれのおしゃべりに熱中しており、誰もアリス達に注意を払っていない。

「これは内緒にして欲しいんですが……」  
店内には歓談があふれていたが、念のためアリスは声を潜めて誰にも吐露したことはない恋の悩みを打ち明け始めた。

\*\*\*

「んー……なかなか、厄介ですな」

アリスが己の恋患いと現状を一頻り語り終えると、サラはパフェの中間層に敷き詰められたコーンフレークをカリカリと小動物のように噛み砕き、細い眉を歪ませた。

「はい……その、すみません」

年上のサラよりも背丈のあるアリスだったが、今は背を丸め小さく項垂れていた。

（改めて言葉にすると、私の言ってることつて無茶苦茶過ぎる……）

サラに伝えた事を要約すれば「絶対嫌われない前提で片思い相手に好かれない」というものだ。個々の言い分に理由があるにしても、結論としてまとめしまうと強欲

にもほどがある。

アリス自身、サラに説明している途中から自分とんでもない我が儘女にしか聞こえなくなってきた。当事者であるアリスでこれなのだから、第三者であるサラが呆れ果てていても無理はない。

「まあ、でも……そういうものですよね」

「えー」

諦めて逃げ出すか、覚悟を決めて吶喊するか——そのどちらか選ぶ道はないと思っただけだけに、サラの思いもかけない肯定にアリスは顔をあげる。

「どれだけ不条理だとわかっていても、好きな人と一緒になりたいたか……恋愛って、そんなものじゃないでしょうか」

「サラ先輩……」

「私だって、今から思えば滅茶苦茶に暴走した挙げ句、彼と一緒になれたんです。アリスちゃんの恋、応援しますよ」

ニコリと、屈託ない笑顔でアリスが口元を綻ばせる。どう見ても年下にしか見えないう少女なのに、その幼い微笑みには不思議な包容力に満ち溢れていた。

「ありがとうございます……」

じわりと、胸が温かくなつた。自分でも嫌になるくらい我が儘な恋心を、もつとも信頼できる友人に共感され、思わず涙腺が緩みそうになる。

「アリスが深々と頭を垂れると、「可愛い後輩の頼みですから」とサラがわざとらしくげに胸を張った。そんなサラのお姉さんぶりがおかしく、アリスは涙を溢れさせる寸前でくすりと笑声を零した。

「ちよつと確認したいんですけど、アリスちゃんが片思いの人に初めて会ったのって、どれくらい前なんです？」

「ええと、九歳の頃だから……八年前です」

片思いの悩みを滔々サラに語ったわけだが、恋愛対象が義父だということは流石に言えないのでぼかしてある。そのため、アリスの片思い相手は「とても前から可愛がつて貰っている年上の男性」として説明してあつた。

「会っている頻度は？」

「大体……毎日、です」

「途中、一年とか二年とか会えなくなっていた期間とかありました？」

「いえ、特には……」

幾つかの質問に答えると、サラは「ううん」と細い腕を組んで可愛らしく唸つた。

「やっぱり、相当に厄介ですね」

「はい……自分でも、わかっています」

これだけ頻繁に会っているのに、女としての好意を欠片も持ってくれないのだ。

そんな相手を確実に振り向かせるなど、至難の業だろう。

「ああ、いえ。そういう意味じゃないです」

サラが首を振る。亜麻色の髪がふわりと小さな肩を撫でた。

「厄介なのはアリスちゃんじゃなくて、相手の方です」

「ええと、私に興味を持たせられないから——」

「いえ。違います」と、アリスの言葉を遮つて、サラが否定を被せる。

「多分ですけど、相手の方はアリスちゃんを女として見ています」

「えっ……？」

曖昧な表現を残しつつも、断定だと言わんばかりの口調でサラが言い切る。

「だって、アリスちゃんって美人だし性格も良いですし、普通の男性なら間違いないで惹かれますよ？ 多分、女として見ているけれど、本人が気付いてないだけなんです

思います」

「い、いえ。それはないです。絶対に」



アリスは男からの視線に敏感なのだ。卑猥な意図が含まれているならばすぐにわかる。ましてや、これまで散々注意を引こうとした義父の視線は、殊更慎重に観察していたのだ。

もし義父が女として見ていてくれたのならば、アリスが気付かないはずが無い。

「ああ、ごめんなさい。言い方が悪かったですね。『本人』というのはアリスちゃんじゃなくて相手のことです」

「相手だとしても、そんなこと……」

主語が入れ替わったところで、そんなことは考えられない。長年家族として暮らしていたからこそ、義父の実直な性格は熟知している。

そんな義父がアリスを騙して嘘を吐き続けるなど、どうしても考えられない。

「嘘を吐いている——って意味じゃないんです。アリスちゃんに女としての魅力を感じているってことを、本人が気付いていないんだと思います」

「そんなこと、あるんでしょうか？ 自分の感情に気付かないなんて……」

「アリスちゃんって、その相手に小さい頃から可愛がって貰っていたんですよね？」

「えっ？ ええ……はい」

いきなり話題が切り替えられたため、アリスは一瞬面食らった。

「相手は独り身でちょっと前まで既婚者、かつ、アリスちゃんとはほぼ毎日顔を合わせていた——となると、本人も気付かない間に強烈な保護者の立場としてアリスちゃんを見ていると思うんです。例えば——」

サラは一旦言葉を切り、アリスの双眸を正面から捉えた。

「アリスちゃんを娘同然に見ていた——とか」

心臓が、飛び跳ねた。

片思い相手を看破されかけ、アリスはテーブルの下でぎゅっと膝を合わせる。

「小さい頃から成長を見守ってきたとすると、無意識のうちに自分を保護者の役割に徹させようとするんです。本当はアリスちゃんに女を感じているはずなのに、保護者としての役がその感情を握り潰します。性質が真逆ですから」

溶けかけたバナラアイスに、サラがコーンフ레이크をばらりと振りかける。

「そうなると、本人はもう自分が本心を騙している自覚すらないんです。改竄された感情を本心だと思っているから、嘘を吐く必要が無い……嘘を吐いてないから、他人も嘘を喝破できないんです」

バナラアイスの中にコーンフ레이크がスプーンで押し込められる。コーンフ레이크が埋没してしまうと、そこには見た目は普通のバナラアイスしか残されていないかった。

「こうなってしまうと、並大抵のことじゃ相手は自分の本心に気付きません。本人自身が保護者としてアイデンティティを確立してしまっているのです、なおさら質が悪いんですよ」

「うっ……」

思い当たる節は、沢山ある。血縁という契りが存在しないためだろう。義父は家族としての絆を深めるべく、一際アリスを大切にしてくれた。

アリスが不埒な男達の迷惑を撥ね付けるように育て、母が亡くなって失意にくれても決して無理に立ち上がらせようとせず、時間をかけて見守ってくれていた。

そんな義父が、自分から娘に手を出せるはずがない。もし手を出せば自分自身が積み立ててきた親としての功績が、根幹から崩壊する。

それらを踏まえれば、保護者としての役割に徹しているというサラの推測には、恐ろしいほどの説得力があった。

ただ、それにしても――。

「サラ先輩……どうしてわかるんですか？」

迷うこと無く核心に切り込んでくる推測は、まるで実際に横から観察していたようになりアリティがある。

「ほら、私って年齢よりちょっとだけ下に見られる傾向があるじゃないですか」

「そう、ですね」

ちよっとじゃ無い――と、アリスは思ったが、そこは黙して頷いた。

「だから、女の子じゃなくて女として見て貰うのに、結構大変な思いをしたんです」

何か苦い記憶を思い出すように、サラの視点が遙か遠くに結ばれる。どうやら順風満帆な学生生活を送っているように見えるサラだが、見えないところで色々と苦労しているらしい。

「さて、現状を正確に認識した上で、どうやって相手に振り向いて貰えるか考えましょうか」

「で、でも、仮説は当たっていたとすると、これって詰んでいるんじゃないか……」

義父が保護欲の化身のようになっていたのなら、告白など絶対受け入れないだろう。義父の性質及び性格上嫌うことはなさそうだが、想いが通じる可能性は絶望的なまでに低い。

「そうですね。多分、どれだけアリスちゃんが真剣に想いを伝えても、相手は絶対に拒絶すると思います」

あっさりと、アリスの懸念をサラは首肯した。わかっていたことだが、いざこの恋

路に未来がないと結論づけられると、胸が締め付けられるような痛みが走る。

「ですから……まずは相手の保護欲を弱らせましょう。正面からダメなら、裏から崩します」

「保護欲を弱らせるって……ど、どうやって……？」

虫や動物なら捕らえて絶食でもさせればいいだろうが、保護欲は実体の無い概念だ。弱らせるという方法からして、まったくわからない。

「まずは本心を相手に気付いてもらいましょう。男の欲望が強くなれば、保護欲だって押さえつけることは難しくなります。アリスちゃんを娘みたいの子じゃなくて、一人の女の子として見て貰う……これがスタートラインです」

「でもサラ先輩。さつき、並大抵のことじゃ自分の本心に気付かないって……」

「はい、言いました。ですから——」

サラは最後まで取っておいた大粒の苺をスプーンで掬い、あどけない微笑みを浮かべた。

「並大抵ではないやり方で、本心に気付いて貰いましょう」

## Hシーン

ベッドに横たわった義父を膝立ちで跨ぐと、アリスは背筋を伸ばし無言でフレアミニスカートをめくり上げる。ムーデーランプの赤みがかった暖色が、美脚を彩る白い輝糸をぬらりと照らした。

「……破っていいのか？」

「ん……」

パンテイストッキングを穿いていると、高い頻度で破いて欲しいと願い出るからだろう。ショーツを透かした美尻を近づけると、義父が碧眼を見上げてくる。

「パパって、パンスト破るの好きでしょ？」

「まあ……嫌いじゃ、ないな」

粗野な嗜好を愛娘に知られるのが後ろめたいのか、父はやや言葉を濁しながらアリスの微笑みから目をそらす。義父のあからさまな照れ隠しが、とても可愛らしい。

（大丈夫だよ。私も、パパにならパンスト破られたいし）

口にはしないものの、アリスは義父の野卑な願望に胸中で同意する。

(パンツ穿いたままのエッチ……なんか余裕が全然ない感じで、凄く興奮する)  
互いに裸で抱き合うセックスが至高なのは揺るがないが、互いに服を乱したままするセックスも大好きだ。

特に、裸になる手間を惜しんで快楽に貪り合うのが、本能に従順な動物らしくていい。人としての誇りなどかなぐり捨て、つがいのオスと交尾に耽溺する浅ましさが、実にふしだらなメスらしい。

「……破って」

露出したショーツをパンテイスティング越しに突き出す。あらかじめこういう流れになることを見越していたので、センチターシームこそクロッチに合わせて楕円を形作っているがマチのない破りやすいものを穿いている。

「あ……」

義父の指が楕円を作る縫い目を掴まんだ。肌に吸い付くように穿かれていた化繊が浮き、パンテイスティングのさらりとした感触が消えた直後、固い指が力強く開かれた。

「んっ……！」

ビリッ——と、極薄の繊維が引き裂かれたとは思えないほど耳障りな音が股間から

弾ける。勢い余った義父の指先が鼠径を擦り、ふとももに爪が食い込む。

アリスのうなじがぞくりと昂ぶり、背筋が甘くおののく。

(パパの野性味が感じるこの瞬間……堪らない。おまんこまで痺れちゃう)

優しい父の指先から感じられる、牡の暴威。パンテイスティングを脱がす等という紳士的な振る舞いではなく、あえて粗暴に破かせることで感じられる父に隠された一面。

その一端を肌から感じ取り、アリスは密かに高揚する。

(後は紐を解いて……)

脇からウエストテープの内側に手を入れ、ショーツの紐をすりと引き抜き、解す。一般的なショーツだとフロントをずらすと次第に股間が圧迫されてくるので、こういうセックスの時はなるべくストリングショーツを愛用していた。

(パパのおちんちんしゃぶっていただけで……こんなに濡れちゃった)

一度手を引き抜いてから、媚丘を覆っていたクロッチの表面を撫でる。たったそれだけで、繊細な布地がズルンと横滑りした。

(パパ、これが見たかったんでしょ？ エふふ、見せてあげる。エッチしたくてお漏らししたみたいに濡れた、女子高生のおまんこだよ)

剥き出しになった蜜巖を、サービスタとばかりに人差指と中指でくぱりと広げた。間に溜まっていた女の淫らかな涎が、剥き出しになっていた義父の腹にとろりと零れる。父の表情には一見して変化はなかったが、その喉がごくりと蠕動したのをアリスは見逃さない。

「いれちゃう、ね」

両足を義父の脇腹の側に着け、ゆっくりと尻を降ろしていく。その際、フレアミニスカート裾をきちんとめくり上げ、肝心の結合部が隠れないようにする淫蕩な配慮も忘れない。

竿腹を見せるまで勃起している義父のペニスを握り、股座と直角に近づける。

「ん……あ……」

秘口に鈴肉が接したところで、たどたどしく尻で円を描く。

(多分、大丈夫だと思うけど……おちんちんをぬるぬるにして……)

もう何度も父の巨根を受け入れてきたが、威容なだけに即座に挿入するのはまだ勇気がいる。念のため、ローション代わりに粘った蜜汁をペニスの先端に塗りたくる。

亀頭冠がべったりと輝き、雁首までじっくり濡らしたところで停止していた腰を下ろしていく。

「ん、あ……はっ……」

極太の肉杭が、女のぬめった隘路にずぶんと入り込んでくる。父のペニスが一ミリ股座の中に隠れるたびに、途方も無い嵌入感が女子高生の桃尻を震わせる。

(お腹が膨らんで……ああ、パパのおちんちん、おまんこをかき分けて……)

父の男根をおあずけされ、空きつ腹に鳴っていた蜜壺。濡れそぼっているのによこしまな渴きに苛まれていた卑しい女股が、甘く芳醇な悦びに満たされていく。

(ああ、もう……これ好き……パパのおちんちんでおまんこがのぼせちゃう)

蜜塗れの牝口に呼応するように、口腔から涎が滴り落ちてくる。涎を嚥下することも忘れ、アリスは挿入の快美を存分に味わう。

「あ、ふ……っ」

尻肌が僅かに父の体に触れたところで、蜜巖に埋もれていた鈴肉が女穴の最奥を突く。子宮が押し上げられ女体が揺さぶられると、桜唇の端から口内に溜まっていた涎が溢れた。

「……ふ、う……はあ……」

慌てて涎を飲み干すと、こみ上げてくる至福に押し出され、アリスはゆっくりと肺に籠もっていた息を吐いた。

「……動けそうか？」

「うん……大丈夫」

初めて騎乗位をしたいと申し出たものの、出だしから動きが緩慢としているからだろう。義父が訝しげ半分、不安半分といった様相で声をかけてくるが、アリスは見栄を張って頷く。

（いつもパパにして貰ってばかりじゃ、飽きられちゃうかもしれないし）

こうして身体を重ねる関係に変化しても、口や手での奉仕は前戯として逐一行われているが、本番の類いはテクニクに秀でた義父にいつも任せっぱなしだ。アリス自身、高い充足感から特に要望があるわけもなく、義父のリードに身を委ねていた。

そんな受け身の姿勢だったアリスに、先輩であるサラはこう警告してきた。

愛されるのに慣れてしまうのは危険ですよ——と。

（サラ先輩の言ってることは正しい。油断していたら、パパが悪い女に寝取られちゃうかもしれないもの）

優しい義父のことだ。もし外面のいい悪女に目を付けられようものなら、弱みを握られて身体の関係が強要されるかもしれない。

最愛の父のペニスに泥棒猫にかっ攫われるなど、考えただけで卒倒しそうになる。

（恋人になったからって油断しちゃダメ。私からパパを誘惑し続けなくちゃ）

愛される女で満足しては駄目だ。男の欲望を進んで満たしてやる女にならなくてはならない。

「うっ……ふ、う……」

父を誘惑する女として振る舞うべく、女が主導権を握れる騎乗位を選んだアリスだったが、やってみて初めてこの体位の難易度に気付いた。

（これ、思っていたより……うっ、メチャクチャに恥ずかしい……！）

父と様々な体位でセックスを堪能し、必要に応じて様々なポーズを取った。中には騎乗位並みに開脚したものもあったが、どれも父が望んだので恥ずかしさも薄れた。

（こんなヤリマンみたいな格好、パパの前では一度もしたこと無いのに……）

貞操観念の希薄なビッチよりも酷い格好を、自身の意思で愛する父の前に晒しているのだ。初めて父を誘惑した時の状況とは格好も露出の度合いも違い過ぎる。

父の前では可愛らしい女の子であろうと心がけていたアリスだけに、ふとももをだらしなく開いて股間を露わにするポーズは、羞恥心の許容値を一瞬で突き破った。

「ん……あっ……はあ、んっ……！」

もつとも、今更泣き言を並べてもしかたない。羞恥を噛み締め、アリスはゆっくり

と腰を動かす。

「お、おいアリス。本当に大丈夫か？ 動くのが辛いなら俺が――」

「平気っ……私にやらせて……んっ」

恥じらいが耳朶を真っ赤に染めていたからだろう。勘違いをした義父が体位の変更を求めようとしてきたので、アリスは断固として拒む。

（恥ずかしいけど……これ、思っていた以上にいい……かも……）

ゆっくりと腰を上昇させ、雁首が露出する程度の位置からふとももの力を抜き、女股を落とす。

ブチュッ――と、淫汁が攪拌される生々しい水音が飛び散り、はしたない泡がどろりと竿肉を滴る。

（おちんちんの先っぽが子宮に……これ、良すぎ……っ）

父の硬質で長大な肉杭が、挿抜に合わせて女の揺籃を突く。子宮が浮き上がるたびに牡に犯されている多幸福感が湧出し、ふとももの付け根が蕩け落ちそうな快感に染められる。

（パパに腰掴まれてパンパンって突かれてる時も、おまんこの奥が気持ちいいけど）

父のセックスでは何度も法悦を味わえるし、どんなセックスでも至極満足しており

不満などない。

（これ……自分の気持ちいいところに、全部おちんちんが触れてくる）

しかし、どれだけ義父がセックスが巧みでも、アリスの体内にある快樂のツボを確実に押せるわけではない。一方で、騎乗位はアリス自身が動いたため、確実に快樂の湧出点をペニスに押しつけられる。

「あっ、んっ……くふっ、ううん！」

膝を大きく曲げ、ベッドが深く沈み込むたびに、女の芯から甘い蜜がべつとりと吐き出される。少女の肢体が牝の悦びに酔いしれ、唇から色に爛れた嬌声が吹き零れる。（声、漏れちゃう……エッチではしたくない声、パパに聞かれちゃう）

父に抱かれている時は何度も甘い悲鳴を奏で淫靡な牝声を爪弾いていたが、そのどれもが父によって導き出されていたものだ。

ところが、今はアリスの自発的な行為によって、淫奔極まりない嬌声をつま弾いている。

「んっ……あふっ……んんっ」

これ以上喘ぎ声は無節操に吐き散らすのが耐えられず、アリスは慌てて片手を口に被せる。動揺に呼応するように、蜜穴がギュッと窄まった。

「いいしまりだ。気持ちいいぞ、アリス」

「うう…：ほ、本当？」

口を覆っていた指の隙間から桜唇を見せると、義父が「ああ」と首肯した。

「アリスのまんこが気持ちよすぎるから、ちんぼがどんどん固さを増して大きくなっていったる」

「んっ、ああ…：っ！」

鈴肉が肥大し、子宮口を押し付けられる弾力が厚みを増す。膣路に籠もった熱が上がり、女汁の粘りがねっとり濃くなる。

（パパが気持ちいいって…：私のおまんこで気持ち良くなってくれてる…：っ）

自分の拙い騎乗位でも、セックス慣れた義父のペニスに快楽を注げると知り、アリスは肉悦に浸りながら感動に打ち震える。

性戯に疎い女子高生のセックスでも大人の男を喜ばせたという事実は、アリスの蜜肉をより蠕動させ、歓喜に酔わせる。

「アリスのまんこが気持ち良すぎて、ちんぼが溶かされそうだ」

「いい、よ…：あんっ。パパのおちんちん、もつと気持ち良くしてあげる」

義父に女として褒められたという願望が、肉悦に没頭しそうになっていたアリス

の意思を奮い立たせる。

（パパを気持ち良くしてあげられる…：このおちんちんを私の虜に…：）

肉悦を浴びた女体は更なる快楽を欲していたが、義父をセックスに耽溺させられる喜びが勝った。結合部からこみ上げてくる悦美の噴水に呼吸を乱しながらも、アリスは淫らな杭打ちに没頭する。

（いやらしい音がしてる。おまんこから、ブチュブチュって…：）

アリスが短い屈伸を繰り返す度に、鋭くも深い雁首が蜜爨を抉る。その都度、淫らを通り越して卑猥な水音が、泡立った性汁と一緒に牝穴から掻き出される。

聞こえてくる場所が菊門に近いこともあり、アリスは羞恥を振り払うべく牝のピストンを早めた。

「ふっ…：はあ…：あっ——キャッ！」

頬どころか顔面を朱に染めながらも淫らな騎乗に勤しんでいたアリスだったが、肉悦に集中力を削がれ、つま先立ち同然だった身体がぐらりと揺れる。

華奢に見えて人並み以上に鍛えられている女子高生の身体だが、セックスの最中ということもあって体幹は乱れている。バランスを崩したアリスは義父の胸に倒れていたが、反射的にフレアミニスカートを離し、腕を突き出す。



故意ではないとはいえ諸手で娘から掌打を喰らい、肺を圧迫された父が「ぐふつ」と頬を膨らませ目を剥いた。

「ご、ごめんなさい。パパ、大丈夫？」

「ゴホッ……ああ、大丈夫だ。アリスは俺より強いだろうけど、体重は軽いから」娘に心配をかけないためだろう。一度咳払いして呼吸を整えると、義父は柔らかに微笑んでくれた。

包容力に満ちた父の優しい笑顔に、恋する娘の心は甘やかにときめく。そうした乙女の心情に共鳴したのか、淫らな蜜爇がくちゆりと窄まった。

「そのままがいい。続きをしてくれないか？」

「っ……うん」

父から請われて断るはずも無い。騎乗位を求められた嬉しさから快哉を叫びそうになるのをぐっと堪え、アリスは短く応じる。

逞しい胸板に両手を揃え、傾いていた上半身を起こそうと腰を前に出した瞬間、膣の奥まで沈み込んでいたペニスがより深く滑り、ぐにゆりと子宮口をなじる。

「はあっ……んんっ！」

膝を曲げて全身を昇降させなくてはペニスをしごけないと思いついでただけに、

この快感は不意打ちだった。両足が鞭で打たれたように痙攣し、股座から背筋を這い上がった愉悦が少女の撫で肩をおのかせた。

「お、おい、アリス？」

「だ、大丈夫……新しい、感覚に慣れなかっただけ」

無防備な肢体に愉悦の痺れが広がり、ぶるぶると震えた桜唇から「は、あ」と濡れた吐息が溢れた。

（ちよつと股を動かしただけで、こんなに感じるなんて）

そもそも、股だけを動かした経験が、アリスの人生において殆どない。

父の男根が蜜穴に嵌入しているのに、この深い挿られ方は予想外だった。

（ゆっくり、浅めにやれば……）

父の下腹で滑らせるようにして、慎重かつ緩やかに女股をスイングさせる。

「ん……あっ……ふ、うん……」

失敗から即座に学習した優等生は、すぐに適切な肉悦を味わい始める。義父の股間に対して直交するのではなく平行に近い形で腰を動かすため、竿幹だけではなく根元に付随した睾丸と肌が擦れるのが嬉しい。

（いっぱい精液出るように、グチュグチュするからね。私に浴びせる白いドロドロ、

いっぱい作って)

深い皺を刻んだ胤袋に、願望と欲望を込めて愛液に浸された会陰を擦りつける。アリスの淫蕩な愛を感じ取ったのか、義父の睾丸がひくりと動いた。

「んっ……おちんちん、中でピクンって跳ねた」

「アリスのまんこが気持ち良いからな。勝手に動くんだ」

「……エッチ」

口では非難するが嬉しさが抑えきれず、自然と頬が綻んでしまう。

その時、アリスはふと気付いた。父の瞳がアリスの顔ではなく、僅かに下方した箇所  
所に焦点を結んでいる事に――。

(パパ、おっぱい見てくれてるんだ)

腰を落として前傾しているため、アリスの乳房は今や最も父の双眸から近い。加えて、スイングピストンこそ緩やかだが、アリスのバストはそれなりに大きいので派手に揺れて見え、必然的に男の視線を引き寄せているらしい。

(いつもだったら、パパからおっぱいを弄ってくれるのに)

父が多くのお男と同じく胸が好きなのは、これまでのセックスを振り返って見て間違いない。これだけ近くに、女子高生の美巨乳が揺れているのに見ているだけに留

めているのは、アリスが奉仕する体であることによる配慮だろう。

(もう……パパってば、どうしておっぱい触ろうとしないの)

義父が我欲に狂わない強い意志の持ち主だと知った上で、アリスは無茶筋な不満を  
煽らせる。蜜穴ほどではないにしろ、女体に渦巻く肉悦は乳房にも流れ込んでいる。

ブラに隠されタートルネックに覆われているので外からは見えないが、淫らに火照  
った乳首は悦美を蓄え紅く熟している。

(うう……触って欲しい。パパの指でぐにぐにって握ねて貰いたい)

卑猥に腰を前後させグチュグチュと生々しい交合をしながら、アリスは肉欲に駆ら  
れた妄想に憤る。義父と繋がっているだけでも、女体には芳醇な悦美が注ぎ込まれて  
いる。それなのに、貪欲な牝の色欲は更に快楽を超越せと、しつこくアリスを焚きつ  
けてくる。

「ね、ねえ……パパ。おっぱい、触って……いいよ」

我慢ができなくなったアリスは、ついに乳房の愛撫を請う。もつとも、言葉の最後  
は羞恥に耐えきれず小声となっていた。

「……それじゃ、お言葉に甘えさせてもらおうか」

いまいち淫靡な女になりきれない娘の心情を慮ったのだろう。父は微かに微笑み、

そつと手を伸ばした。

「はあ……くふう……んっ」

硬い指からは想像も付かない柔らかなフェザータッチが、アリスの双乳を左右から包み込む。ターゲットルネックと義父の指が触れ合うたびに、シュリシュリと柔らかな摩擦音が耳朶を擦る。

甘い漣が乳肌を色づかせ、アリスの呼気に艶めかしい色を重ねる。

「アリスのおっぱい、綺麗な形をしているな」

「ありがと……んっ、はあんっ」

双丘の輪郭をなぞるように触れていた掌が、底に回って乳肉をたぶたぶと弾ませる。女体に張り付くようにして着込まれたターゲットルネックが、美しく形作られた乳房が崩れる様を忠実に描き出す。ムーディーランプによって作られる影が、女と男の動きに合わせて複雑に変化した。

（パパにおっぱい褒められるのは嬉しいけど、今はそういうのいらないうつ）

父に胸を触って貰うという目的こそ叶ったが、肝心の触り方には大いに問題がある。（服の上から触られても、じれったさが増すだけなのに）

乳房の愛撫は心地良いが、これでは快感を炙り出す心地良さでしかない。

アリスは欲しているのは、心が乱れ狂うような激しい快樂だ。

（おっぱいが零れるくらい力強く揉んだり、乳首が真っ赤に充血するくらい潰して欲しい……荒々しくおっぱいを可愛がって欲しい）

ブラのカップに乳首が擦りつけられるだけの快樂では、まるで足りない。己の願望が期待だけでは実現しないと理解したアリスは、思い切って父の手を掴んだ。

「おっ……と……痛かったか？」

父の疑問には応えず、一瞬だけ躊躇を挟んだ後、ターゲットルネックを一気にめくり上げる。ブラのカップの頂点で一度ターゲットルネックが引っかかり、直後勢い良く胸の谷間が曝け出された。

「ハア……ハア……」

淫奔な熱を帯びた呼吸を隠す余裕すらなく、はしたない焦燥に駆られるままにアリスは乳房に指を這わす。

ブラの中央を摘まみ、指を鳴らすようにして交差させた。フロントホックが解かれ、弾けるようにして透感のある美乳が露出する。

「ねえ……パパ……」

十七年かけて実らせた豊かな乳房をずいと押し出す。アリスの淫樂を存分に吸い上

げた乳首が、カップに押し込まれていた反動とばかりにピンと艶やかに勃つ。

「あっ——はあんっ！」

さすが義父となって長いだけあり、智鷹はすぐさまアリスの意図を汲み、ブラを払って乳房を鷲掴みにした。

上質な絹糸を彷彿とさせる乳肌に、父の雄々しい指がずぶりと食い込む。指と指の間に挟まれた乳首が圧迫され、押し流されてきた血流が乳暈をパンパンに膨らませる。(ああ、いいっ！ おっぱいが気持ち良すぎて、頭がバカになっちゃいそう)

慣れない騎乗位による交接とは異なり、父の指使いは早くも膨大な快楽を乳房に醸成させる。溢れ出してきた快感がアリスの腕を汚染し、女体がガクリとバランスを崩した。

「おっぱいをこんな真っ赤に膨らませて、俺に揉まれるのを期待していたのか」

「あんっ、パパッ。乳首、カリカリしちゃ——ああんっ」

親指と中指で乳暈の圧迫をしながら、小さく隆起した乳首を人差し指で細やかに引っ掻く。乳首はとても繊細だ。本来なら微かな痛みを伴っただろうが、女体が発情しきっているので微弱的な刺激はそのまま性悦へと昇華されてしまう。

きちんと手入れされた男の爪で甘やかに乳首を引っかかれる度に、快感の小さな爆

発が生じ、アリスは色塗れの悲鳴を奏でる。

「これだけ赤く膨らんでいたんだ。むず痒くてやるせなくて、辛かっただろう」

「あんっ、そうだよ。パパにおっぱい弄って貰いたくて、ずっと我慢していたの」

父の親指が乳暈を撫で付け、にじり回す。性感帯を広く刺激され、アリスは身体をこれ以上崩すまいと義父の胸板に強く指を立てた。

「俺に奉仕しているからって我慢していたんだな。偉い子だ、よく頑張った」

「そ、そんな……あんっ」

これだけ義父を誘惑したのだから、いやらしい娘だと思われても仕方ないし、それが当然だと思っていた。

(パパ、褒めてくれた……頑張ったって……偉い子だって……)

まだ十七歳でありながら性の愉悦に耽溺しきっているのは、アリス自身が自覚している。そうした享楽に耽溺しながらも、裏で密かに奮闘していた努力を父はしっかり認めてくれていた。

その見守りが、アリスの四肢を嬉しさに蕩けさせる。

「ねえ、パパ。私、良い子？ こんなエッチなのに、良い子なの？」

「アリスは昔から変わらない。いつだって、とても良い子だ」

「ああっ、パパあっ！」

どれだけ少女から女として成長していても、アリスの変わらないところはしっかりと見ていてくれてる。親子の深い繋がりが、アリスの喜びを飽和させる。

「好き、好き好きっ！　パパ、好き！　大好き！」

乳房を弄る義父の手が、乳首を頂点として握り込まれる。乳房が内側から圧迫され、乳暈が快楽に融解した。娘の口からストレートな愛情を浴びせかけられたからだろうか。臆に潜り込んでいる男根が雄々しく固さを増す。

「アリス、もっとまんこで奉仕をしてくれ。俺のちんぽを、お前のまんこで扱いて欲しいんだ」

「うん、頑張る。私、パパに奉仕するからっ。いっぱい、パパのおちんちんを気持ち良くするっ」

父へ感謝を込めて、乱れた娘は股を卑猥に往復させる。精袋に深い皺に染みこんだ愛液が無数の泡に姿を変え、ベッドのシーツへじつとり垂れた。

（体験版終了）